
オモイビト

毒薬娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイビト

【Nコード】

N6069L

【作者名】

毒薬娘

【あらすじ】

コナン達は組織を壊滅させたが、APT X4869のデータを得ることができず、コナンは父の友人のインターポールと外国で、哀は日本で薬の研究を始めた。しかしやはりAPT X4869のデータがない限りでは解毒剤は完成できないと判断し、コナンは十年もの研究を中断して日本へ帰国。蘭に全てを話して辛い思いをさせるより幸せになってもらおうと考えたコナンは博士やFBIの力を借りて“工藤新一は死んだ”というニュースを流す。そんなコナンのために未だに解毒剤の研究を続ける哀だが、一方でコナンの体は徐

々に弱っていく。シリアス甘めなコ蘭（新蘭）をお楽しみください。

第1話 十年ぶりの再会

“人が人を殺す理由なんて知ったこっちゃねえが……”

“人が人を助けるのに、論理的な思考は存在しねえだろ？”

雨の中、薄れて行く意識を必死に繋ぎ止めようとする私に背を向けた彼が、連続通り魔にトドメをさすように吐いた言葉。私に、彼への想いを気付かせてくれた言葉。

「ねえ、新一。コナンくん伝いだけど、死んでも帰ってくるから、って言ったよね」

お父さんは近所の人と麻雀をやるからと家を出、一人寂しい夜を過ごしていた私は深夜になっても眠れず、机の上に置いてあった写真を思わず手に取った。込み上げて来た思いを言葉にして、それなのに、と続きを漏らす。目いっぱい溜まった雫が私の両手の中の写真にポタリと落ちて行った。私の涙を浴びても、皮肉にも笑顔を変えない写真の中の彼。

「新一も、コナンくんもいなくなっちゃって、もうどうしたら良いか分からないよ……」

写真を握る手に力がこもる。写真の中の彼はもういない。待つ必要もないけれど、それでも待っていたいのは、彼がまだ生きていると信じたいから。

——ピンポーン

涙の声を遮るように部屋中に鳴り響いたチャイム。こんな時間に来客なんて明らかにおかしいけれど、お父さんが帰って来たのかと思いい、私は重い足を持ち上げた。

「もう、お父さんったら。帰って来るならもっと早く……」

ガチャ、とドアを開いた瞬間、突然視界が青になった。

青いブレザーと、緑のネクタイ……？

——帝探高校の制服。

昔、自分が来ていた制服を思い出し、ドクンツと胸が高鳴る。その制服を着ている自分より背の高い人物に、私は抱きしめられていた。

まさか、まさか……！

ゆっくりと顔を上げる。顔を見る前に耳元に口を寄せられ、びっくりとすれば、思いがけない言葉を耳に落とされる。

「蘭……姉ちゃん」

十年経っても忘れなかった声は確かに新一なのに、口調が懐かしい眼鏡の少年だった。

「新一じゃ、ないの？」

やつのことで顔を上げると、そこには新一そっくりだが、やはり眼鏡をかけた懐かしい少年の面影。

「コナンくん……？」

「久しぶりだね、蘭、姉ちゃん」

コナンくんは蘭姉ちゃん、と呼ぶことに少し躊躇っているように見えた。優しい口調、懐かしい声、変わらない笑顔。でもそれは何度聞いても待ちわびていた新一ではなくて、思い出したように涙が溢れかえるばかりだった。

「コナンくん、どうして？」

止まらない涙を止めようとするも、それはまるで無理で、必死に笑顔を作る私の頬にコナンくんは温かい手を添えてくれた。

「また僕だけ日本に住むことになって、これからは帝探高校に通うんだ」

「それじゃあ、またうちにいてくれるの？」

ううん、と笑みを交えて答えたコナンくんは少し顔を曇らせて呟く。

「新一兄ちゃんの家、もう使わないから使ってくれって言われたんだ」

——ドクンッ

一瞬、涙が止まる。ああ、聞かなければ良かったと後から後悔。思わずコナンくんから視線を外し、俯いてしまった。

「蘭姉ちゃん、ニユース見たの？」

工藤新一が死んだというニュース。それが私を狂わせたきっかけとなったのだ。しかし、死体は見つかっておらず、警察や鑑識の捜査結果であるとのことで、私はその情報だけを頼りに未だに新一の生存を信じているのだった。

その新一そっくりなコナンくんは、不安そうな表情をこちらに向けて、遠慮がちに私の方に手を置く。それがどうしても新一に見えてしまつて、自分は重症だと心の中で嘲笑した。

「コナンくん……」

先程より心配そうに顔を覗き込まれる。その一つ一つの行動、表情、声までもが全て新一で、否が応でも、十七年間築いてきた思い出の中の新一を思い出さなければならなかった。覗き込んでくるコナンくんの顔が徐々に歪んで見える。瞼が熱くなるばかりだった。

「コナンくん、今日だけ……」

「え？」

「今日だけ、許して……」

両手を伸ばしてコナンくんの背中に腕を回す。きっとコナンくんは驚いているだろうけれど、私は嬉しかった。コナンくんに会えたことが。温もりを感じれることが嬉しくて強く抱きしめる。溢れる涙

を迷うことなく、声を上げて子供のように泣いた。それに応えるように抱きしめ返してくれたコナンくんが震えているように感じたのは、きっと私の気のせい。

新一を待ち続けて十年。

新一の死の知らせを受けたと同時に、私の時間も止まった。

第1話 十年ぶりの再会（後書き）

はじめまして、毒藥gürです。

サイト活動をしていましたが思うように更新できず、それでも小説は書きたいと思ってこちらにやってきました。

いろいろとグダグダな部分が多くて理解不能な点が多数あるかと思いますが、なんとか頑張っで行こうと思っていますのでよろしく願います。

カップリングは基本的に新蘭、コ蘭、平和です。

甘々系な話は自分で書いていて恥ずかしくなる場合が多々あるため、シリアス系が多くなるかと思いますが、そこにもちゃんと甘はいれるつもりなのでよろしく願います^^。

第2話 複雑な心境

気分とは裏腹に雲一つない青空。良かった、と少しだけ安堵の溜息を漏らした。もし雨やら嵐やらだったら、俺の気分は更に下がっていただろう。そんなことはごめんだ。

上履きに足を入れて校長室へ向かう。失礼します、とノックをして開ければ、扉の向こうには脚の短いテーブルとソファの間に校長と蘭が立っていた。簡単に挨拶と自己紹介を済ませ、蘭に教室へ案内されている今、彼女はそれまで気まずかった沈黙を笑顔で破ったのだ。

「驚いちゃった。転校生が来るとは聞いていたけど、まさか私のクラスだとは思わなかったから」

「僕もだよ」

「ふふ、楽しみにしててね。私のクラスにはコナン君を除いた少年探偵団、全員がいるのよ！」

懐かしいな、アイツらに十年ぶりに会えるのか、なんて呑気なことを考えながら、俺は少し前を歩く蘭の綺麗な髪を目を細くして眺めていた。

廊下で待機させられ、ざわざわと騒がしかった教室が蘭の登場によって一瞬で静かになった。そして、廊下にいても聞こえる蘭の声は俺の知らない蘭のようで、すっかり大人になったのだと実感させられた。

「今日は転校生が来ています」

その一言に少し盛り上がる教室。誰かな、どんな子かな、なんて盛り上がられても転校生の俺としては困るもんだ。

「じゃあ入って」

ガラスと扉を開けるには少し勇気が必要だった。十年前に別れを告げた仲間達とのちよっぴり照れくさい再会。いや、それだけではない。少年探偵団に会うことによって、また振り出しに戻ったのだという現実を受け止めざるを得ないのが俺の心をざわつかせた。

工藤新一は死んだ。

分かってる、分かってるんだ。何度もそうやって自分に言い聞かせ、勢い良く扉を開いた。

「コ、コナンくん!!」

俺が教室に入ったと同時に席を立って大きな声を上げたのは、十年前までカチューシャをしていたはずの歩美だった。彼女だけではない。デブに磨きをかけたように琢磨そばかすしくなった元太、昔と変わらない雀斑を頬に散りばめている光彦。そして俺の登場を知っていたかのように薄く笑う赤茶髪ウェーブヘアの灰原。その他にも同じ帝探小学校だった奴らが口々に俺の名を呼んでいた。

「江戸川コナンです。よろしく」

「じゃあコナンくんは哀ちゃんの隣の席に座って」

ざわざわと教室が騒がしい中、俺は灰原の隣りの席にカバンをゆっくりと下ろして溜息をついた。

「よく平気でいられるわね」

「何がだよ」

突然変なことを言い出すコイツの癖は変わっていなかった。怪訝そうに問う俺に灰原はクスリ、とまた一つ笑みを零した。

「こんな形で彼女と再会するなんて」

全く、ばかっているわ。と付け足して悪態を付ける灰原。

「工藤新一は死んだんだ。もう関係ねえよ」

蘭を見つめてそう言った俺に、灰原は少し目を見開いた後、そうね、と呟いて薄く笑った。

第2話 複雑な心境（後書き）

いつぶりでしょうか？

大変遅れてしまって申し訳ないです。

これからはなるべく更新したいと思うのですが、

頑張ります。

第3話 狂い始める己の感情と体

本当にこれで良かったのか？

もう一人の自分が俺に問う。そんなこと、自問自答したところで、もう現実を変えられない。分かっているけれど、蘭の涙を見るとどうしようもなく胸を締め付けられ、ただもがくことしかできない自分が情けない。

久しぶりの探偵団の“一緒に帰ろう”という誘いを断り、俺は真っ直ぐ毛利探偵事務所へと足を運んだ。ここへ来るといつも思う。

「また振り出しか」

はあ、つと溜め息を大きく吐き出してドアノブに手を掛けようとしたその時だった。

「せやから、納得いかへんねん！」

懐かしい、関西弁の血の氣が多い、この声は聞いたことがある。そう思った瞬間、俺は勢い良くドアノブに近付けていた手を離れた。

「ええ加減にしい！現にニュースでやってるやん！あんた探偵やろ！真実を受け止めんのが探偵なんとちゃうん！」

「誤報かもしれへんやろ！遺体は見つかつたらん。只の行方不明。でも死にました。ありえへんやろ！遺体も見つかつてへんのに死んだて決め付けるなんて納得できるかつちゅーねん！」

「二人とも、もうやめてっ……」

涙混じりの蘭の声によって、その言い争いは止められた。

「兎に角、俺は信じひんからな。工藤が……工藤が死んだなんて」

やはり、服部にも連絡しておくべきだっただろうか。アメリカに行くなんて言ったら、うっかりアイツもついて来るんじゃないかと思つたから、俺はアメリカに行くことも黙っていたし、発ってから十年間全くアイツに連絡をしていなかった。

このまま会つのはまずい。また明日にしようと帰りかけた時、探偵事務所のドアがゆっくりと音を立てて開いた。

「人影が見えると思ったらコナン君だったのね！待ってたわ。さあ、入って」

蘭に手を引かれ、中に入った瞬間だった。バチリと服部と目が合い、フリーズしていた。なんや生きたるやん、とか言つて笑い飛ばしてくれるとか甘い考えをしていた俺は真正正銘のバカだ。

「久しぶりやね、コナン君」

「久しぶり、和葉姉ちゃん……」

服部はしばらくフリーズしていた状態から俺の声を聞いた途端、物凄い剣幕になり、物凄い力で俺の胸ぐらを掴んで空いた片方の手で拳を作り、それは俺の左頬に食い込まれ、体が壁へと勢い良く飛ばされた。

きやあああ、という蘭達の悲鳴を耳の片隅で聞きながら、俺は殴られた頬を優しく撫でて、ぼやけた視界の上から服部の怒りに満ちた

瞳を捉えた。

「十年も連絡よこさんと何しとったんや、お前は」

「はっ……とり」

「何しとったんやて聞いとんねん!!」

再び胸ぐらを掴まれた俺は、例によって今度は違う壁へと飛ばされた。周りの家具や物は散らばり、散乱している。どんだんぼやけていく視界からまた服部の腕が伸びて来るのが分かった。

「もう、やめえ平次！久しぶりの再会やのに何で喜ばへんの！何で殴るん！」

和葉ちゃんが必死に服部の腕を掴み、制していた。まだ服部は鋭い目で俺を上から睨み潰していた。瞬間、頬に冷たく、少しピリツとする刺激を感じて顔を歪めると、横から“ごめんね、大丈夫？”という蘭の優しい声を耳にした。俺はその冷たいタオルを蘭から受け取り、蘭に手を借りて力の入らない足でヨロヨロと立ち上がった。

「久しぶりの再会やと？それを喜べやと？笑わせんなや」

「平次兄ちゃん」

「十年間心配しとった俺は何やねん!!」

「平次兄ちゃん」

「何であんな嘔吐いたんや!!」

「平次兄ちゃん」

「答えろや、工藤！！」

今、気付いた。先程、服部に殴り飛ばされてメガネが吹っ飛び、今はかけていなかった。容姿、声、全てがまるでクローン人間かのようには思わせるほど似ている。ごまかせるはずがない。

「コナン君が、新一……？」

「嘘やん。そんなどうせ、平次の冗談やろ」

「嘘でコイツのことこんなに殴らへんわ」

蘭の視線が、いや、それだけではない。和葉ちゃんと服部の視線もが痛かった。まるで信じられないというような。しかし、ここで正体をバラすわけにはいかなかった。

「いい加減にしてくれよ！何なんだよ！久しぶりに帰って来たらいきなり殴られるし、俺のこと新一兄ちゃんとか言うし、意味分かんねえよ！新一兄ちゃんは死んだんだ！俺は江戸川コナンだ！俺は俺なんだよ！！」

これが、精一杯だった。

気付いたら走り出して、無我夢中で走って走って走って走って走って……。

自分を偽って生きることがこんなにも辛いことだったなんて、そんなの十年前から分かっていたはずだ。自分で怒鳴りつけておいて、その自分の発言が自分を傷付けた。

“新一兄ちゃんは死んだんだ！”

“俺は江戸川コナンだ！”

“俺は俺なんだよ！！”

過去は振り返らないで、前だけを見て生きよう。

そこにはもう、“江戸川コナン”しかないから。

過去を振り返ったら、“工藤新一”が恋しくなってしまうから。

——ドクンッ。

「っ！！」

この痛み、感じたことがある。体中が溶けていくような感覚。震えが止まらない。呼吸がしにくい。ヨロヨロと覚束無い足取りで、時折何かに捕まりながら自宅を目指す。途中、大丈夫ですか？という声が聞こえた気がしたが、それどころではなく、最終的に膝を折って胸を掴んだまま地面を這い、空いた手を必死に伸ばすことしかできなかった。

第3話 狂い始める己の感情と体（後書き）

お久しぶりです。約3ヶ月ぶりでしょうか？

夏休みをのんびりと過ごせる……わけもなく毎日課題やら何やらに終われています。それでも普段よりは時間があるのでちまちまと続きを書いていました！

まず今回を書いている時に悩んだのは、

コナンがもしアメリカに行くなら絶対平次にちゃんと伝えるし、連絡もとるよな。

と単純に思ったことです（笑）

あくまで私の勝手な想像なので実際は分かりませんが、平次だって組織のことを調べてくれたり情報提供（水無れなの父のことなど）してくれているわけだから、アメリカへ行って解毒剤の研究をするなら、きちんと伝えるだろうなと原作を踏まえるとそう思ったわけです。そこにすっごく悩みました。でも伝えてもらっちゃあこのストーリーが書けない（平次がコナン殴れない）のでそこは読者様は大目に見て頂こうと思いました。勝手すみません。

それからもう一つポイントなのが、コナンの心臓がドクンッとなつてしまい始めたことです。

それでは今回はこれまで

第4話 本当にそれで良いのか

真っ暗な世界。

ここは、どこだ？

見渡せども見渡せども闇の世界で、ただ、この暗闇の空間にただ独り、ぽつん。

“コナンくん”

ああ、心地良い。愛しい声が聞こえて来る。俺を懸命に呼ぶ、そんな優しい声の持ち主はどこにいるのだろうか。

「コナンくん！-」

はっ、として暗闇から抜け出せば真っ白な天井と心配そうに俺の視界の端から顔を覗かせる蘭。

「蘭……姉ちゃん？」

「良かった！街中で倒れたって聞いたからびっくりしちゃった」

「ほんまやで。でも無事で何よりやわ」

蘭の後ろからひょこつと顔を出した和葉ちゃんに、もしかしたらアイツも来てるのでは、と思うと一瞬体が強張った。

「じゃあ、私ちよつと博士に連絡してくるね」

「ほな、アタシ飲み物買つて来るわ！」

蘭の靡く長い髪と、和葉ちゃんの左右に揺れるポニーテールを交互に見つめながら、俺は目だけで彼女たちを外へ送り出した。そしてまた、独りになる。

「独り？」

声に出してみると胸がキリキリと痛んだ。ドクン、ドクン、と心臓が激しく脈を打つ。そういえば、あの痛みは何度か感じたことがある。身体中の細胞が急速に成長し、骨が溶けそうになるほどの痛み。そうだ、“工藤新一”。あの痛みを感じたなら戻っているはずだ。ふと両手を天井に向かって突き上げる。そして徐々に近付けてみた。しかし十年も戻っていないため、最後に戻った体も今と同じ年の高校二年だった。手を見つめただけで分かるはずもない。はあ、と一つ。溜め息が自然と出た。

「戻ってへんで」

いきなり声がしたものだから驚いて声も出ない。起き上がろうと思ってもみるが、声の主が誰か分かっているから、今はソイツの顔を見たいと思わない。

徐々に近付いて来る足音と同時に、俺の苛立ちも合わせて高まっていく。

「テメーが殴ったこのツラを拝もうつて算段か？」

「アホぬかせ。俺かてそんな暇ちゃうわ」

コイツの考えてることは相変わらず分からない。つい数時間前まで殴りかかって来たかと思えば、機嫌が直ったような口調。けれど、まだどこかぎこちない感じがするのは俺の気のせいだろうか。

「すまんかった」

「は？」

「すまんかった。殴ったりして」

鳥肌が立つとはこのことか、と改めて思う。ゾワツとした。明日は嵐だろうか、大震災だろうか。そんなことを思いながら俺は上半身を起こし、わざと服部にそっぽを向いて窓の外を眺めた。夕日が実に綺麗だった。それはそれは、言葉を失うくらい。

「おいコラ、聞いとんのか工藤！」

「あ？何て？」

「せやから、殴ったりしてすまんかった……って何回言わせんねんこのアホ！」

ちよつと態度を変えるだけですぐに元の調子に戻る。その表情や態度が面白くて、だからコイツは見ていて飽きないのだろう。

おれは思わずクククと堪えていたはずの笑いを口から零した。

「何を笑てんねん」

「オメーはそれくらい元気な方がオメーらしいよ」

そう言った俺に服部は、はあ、と一つ溜め息を漏らし、薄く笑みを浮かべた。夕日に照らされたその表情は、少し悲しげに見えた。コイツは今、何を考えているのだろうか。悩む前に服部が小さく口を開いた。

「何やねん。俺が慰めてもらいに来たみたいやんか」

「は？お前、俺を慰めに来たのか？」

「おう。殴つてしもてへこんでるんとちゃうかなあと思うてな。さつき怒鳴り散らした言葉の意味も気になるしな」

“俺は俺なんだよ！！”

ああ、そういえばそんなこと。せっかく警察やFBIに力を借りて工藤新一は死んだということにしたのに、服部が俺の正体をバラすものだから。今思い返すと少し大人気なかったかもしれない。あんなに怒鳴り散らすなんて確かに自分らしくなかった。

「……そのまんまの意味だ。俺はもう工藤新一じゃない」

「いやいや意味分からんて。解毒剤はどうなってるん」

俺は全てをコイツに話した。組織を潰した時にAPT-X4869のデータは手に入らなかったこと、灰原と力を合わせて研究に臨んだが無理だったこと、そのために父さんの友人のインターポールの力を借りてアメリカで十年間解毒剤の研究を続けて来たこと。

「けど、それもダメだったんだ。今はまだ研究も保留してんだけど、俺はきつともう無理だと思ってんだ。だから日本に帰って来て……」

「毛利の姉ちゃんをこれ以上待たせるんは申し訳ない。幸せになってもらいたいから工藤新一の存在を消そうって訳やな」

「ああ」

「アホちゃうか」

服部は俺をバカにしていると云わんばかりに睨みつけ、口の端を釣り上げて嘲笑った。

「何で十年も連絡して来えへん工藤をあの姉ちゃんは待ってると思う？幼なじみやからってそんなん所詮、他人やろ？何でやと思う？」

「それはっ……」

息詰まる俺に服部は更に、はあ、と溜め息を大きく吐き出した。

「好きなんや。あの姉ちゃんはお前のことが！」

そんなこと、恋愛に疎い俺だってコイツに言われなくても薄々そんな気くらいはしていた。だから俺は諦めて蘭に他の道を歩んでもらおうと思つて。

「好きな奴が死んだなんて知らせ聞いたら、お前やつたらどうすんねん」

「俺、だつたら……？」

もし、蘭が死んでしまったら？

そんなの考えたくもない。考えただけで吐き気がする。でも確実なことはただ一つ。この目で確かめるまで絶対に信じないだろう。そしてそれがもしも本当だったら。俺は絶望故におかしくなるのではないだろうか。

「あの姉ちゃんもお前と同じや。今、絶望に襲われとる。それを幸せと言えるんか？」

「じゃあ、あなたならどうするの？」

突然聞こえて来た少女の落ち着いた問いに、服部は顰めっ面で俺を見、その後ろのドアがガラリと開いたかと思えば見慣れたアイツ。それに服部も気付いて振り返る。

「あなたが江戸川君と同じ立場だったらどうするのって聞いているの」

「そんな俺やったら正体バラすに決まっとるやん」

「あなたはそれが正解だと思っているの？」

特徴的なウェーブがかかった赤茶色のショートヘアを静かに揺らしながらこちらへと歩み寄って来る。真っ直ぐ目を見た真剣な顔付きで。

「何が言いたいねん」

服部の言葉を嘲笑うかのように鼻で笑った灰原に服部は更に顔をしかめ、何がおかしいねん！と怒りの言葉を口にしようと息を吸ったところで遮られる。

「あなたの言うことも一理あるわ。けど、考えてみなさい。もしもあなたが幼児化して正体をバラせば、優しいあなたの彼女のことだから幼児化したあなたのことを自分の痛みのように泣くんでしょ。ね。江戸川君はそれを恐れているのよ。もう彼女の涙は見たくない。これから先、何度も涙を見ることがあるのなら、工藤新一を殺して彼女の記憶から少しずつ消していこう、ってね」

灰原の分かりやすい説明によって反論できなくなった服部は、事実かどうかを確かめるためだろうか、俺の方へと振り返り、瞳で本当かどうか尋ねた。

「本当だ。灰原の言うことが全部、俺の考えであり、もう決めたことなんだ」

お前はほんまにそれでええんか、と。声を震わせた服部の言葉が痛く俺の耳に刻まれた。

第4話 本当にそれで良いのか（後書き）

お久しぶりです。

まずちよつとしたお知らせです。

改名しました！

毒薬girl ↓ 毒薬娘

ちよつとした出来心です（笑）

もう二度と改名しませんのでこれからはどうぞ毒薬娘でよろしくお
願います^^！

さてお久しぶりの更新となりました。言い訳になつてしまいましたが
多忙すぎてなかなか更新できず……。やっと第4話になりました、
ふう

正直何話くらいまで続くとか全く分からないので何とも言えませんが
先はまだまだ長そうです。とりあえず気ままに更新しようと思っ
ています。

前回といい今回といい、シリアス続きで（とゆーか最初からシリア
ス↑）気が重いかもしれませんが、すみません。お久しぶり哀ちゃん
！って感じです。私は彼女の意味深な笑みとか大人びていて落ち着
いた口調が大好物なんで哀ちゃんを書くのは本当に楽しかったです。
ます。CPは基本、公式の新蘭（コ蘭）が大大大好物なんです、
コ哀も興味あるのでいつか書けたらな〜なんて思っています。コナ
ンに絶賛片思い中な哀ちゃんが1番好きなんですけどね！

話が太分それてしまいましたが今回も楽しんで頂けていたら幸いです
す*

第5話 信じがたい真実

蘭達が帰った頃を見計らって、もう一度、灰原が見舞いにやって来た。——というより、俺が呼び出したに等しい。

「発作？」

「ああ、例の薬の時と全く同じだ」

俺が運ばれた際に検査をしたそうだが、結果は皆無。明日また再検査をするという話を医師から聞いたが、どうせ結果など出ないだろう。なぜなら、あの痛みは確かに。

「……」

目を瞑り、顎に指を添えてじっくり考えている様子の灰原。何やら険しい表情で、声をかけるわけにもいなくて、俺はただずっと彼女の顔を見てるだけ。

「考えられるのは、たった一つ」

「…… たった、一つ？」

「ええ。ただし、あなたがこの先、自分がどうなろうと全てを受け入れる覚悟ができていれば話せる問題だけだ」

病院独特の薬品の匂いが鼻をつく。窓から零れる夕焼けの橙色の光が灰原を包んだ。それに照らされた彼女の顔はとても真剣で、冗談を言っているわけではないと悟る。ただ、その表情に少なからず悲

しみが含まれていることが伺えたのには、知らないふりをした。

「ああ。覚悟は、できてるよ。だから話してくれ。気になって今夜は眠れそうにもねえよ」

「話したらもつと眠れなくなるかも」

「灰原」

自分がこの先、どうなってしまうのか。何となく恐怖心とかは湧かなかった。もしかしたら、とうの昔にその覚悟とやらはできていたのかもしれない。

「お前も覚悟が必要なんじゃねえのか」

「……」

彼女は俺から目を逸らして視線を宙へ泳がす。これは八割肯定と見て良いだろう。都合が悪くなると目を逸らす彼女の癖を俺は知っている。もう一度、灰原、と。声をかけても彼女はこちらを見ようとせず、その代わりに身体を少しだけビクツと反応させた。

「俺は死ぬのか」

「……っ！」

「はっ、俺は探偵だぜ？お前の顔見りゃ一目瞭然だっつーの」

「ふ、あなたらしいわ」

「……お前は覚悟できてんのかよ」

「一度死のうと思った身だもの。覚悟なんて必要ないわ」

ならば、どうしてそんな泣きそうな顔をしているのか。聞きたくても何となく聞けなかった。きっと恐れている。灰原も、俺も。そう思って心中で自身に嘲笑した。

「副作用よ。A P T X 4 8 6 9 の副作用が出始めたの」

「どうしてそんなのが今更……」

「あなたの身体が例の薬によって縮んでしまったのが17才の冬。小さくなったあなたの身体が幼児化してしまった際の年齢までに成長してしまったのが、おそらく原因よ。それまで十年間、副作用という名の猛毒はあなたの身体の中に蓄積されていた。もちろん、私もね」

灰原の話によると死ぬ確率はまだ分からないが、恐らくかなり高いであろうとのこと。それはそうだ。何と言ったって身体から発見されないほどの威力を持つ猛毒なのだから。だが、俺はその言葉を聞いても自然と驚きはしなかった。どこかで、どうせ大丈夫だ、なんて思ってる自分がいるのだろう。どうも俺は詰めが甘いようだ。

「ごめんなさいっ……」

「何で謝んだよ」

はは、と笑ってみせた。俺の笑顔は彼女の瞳にどう映っているのだろうか。そんなことを思った刹那、彼女の瞳に溜まる涙に気付いて、

俺の顔からも努力して作った笑みが簡単に消えていった。

「全ては私の所為だから」

「お前は組織の言いなりになってやっただけだ。利用されていただけなんだよ」

「それでも直接作ったのはっ、」

「俺はお前の所為なんて全く思っちゃいねえよ。んなことより、今はどうすれば副作用から逃れることができるか。一緒に考えようぜ」

ありがとう、と。か細く震えた声で呟いた灰原は溜め息を零して、俺に寂しげな背中を見せて病室から出て行った。

そういえば、考えてもなかった。

——俺は死ぬかもしれない。

「まさか、な？」

はっ、と笑ってみたが先程から嫌な汗しか流れない。今になって恐怖に襲われ始めたとも言っのか。全く、こんなの俺らしくない。今日何度目かの嘲笑。

「蘭っ……」

ほとんど無意識だった。彼女の^{アイツ}名が小さく口から零れ落ちたのだ。瞳を閉じれば、瞼の裏に優しく笑顔を浮かべる、蘭。まだ、彼女に

想いを伝えていなかった。後悔だけはしたくない。しかし、工藤新一ではなく江戸川コナンである俺に気持ちを伝えられたところで彼女はと思うだろうか。

気付けば外は真っ暗で。今日はいつもより空が暗いことに気付く。

「新月、か」

雲がかかってたせいか、星一つさえ見当たらなかった。光のない漆黒の闇夜は、まるでぽっかり穴が空いた俺の心のように、目を逸らすわけにはいかなかったのだ。

第5話 信じがたい真実（後書き）

遅くなりまして大変申し訳ないです。

実はもう一つ連載をしようと決めてる話があつて、そちらに手を入れていたらこつちを放置してしまい……。優先順位を考えてこちらから頑張つて更新していきますが、違う方の連載もどうぞお楽しみに！

まあこちらが完結するまでまだまだ時間はかかりますが頑張ります！
今回もありがとうございます（＾Ｏ＾）／

第6話 愛したいのならば愛せばいい

コナン君の退院は意外と早く、今日は退院パーティーをしようと言
い出した歩美ちゃんの見解に賛同した大勢の方が顔を覗かせに阿笠
博士の家に集まる。私と園子は買い出し担当で、少年探偵団と博士
はコナン君を驚かせようと何か計画をしていた。

すっかり寒くなってしまったこの季節。吐き出された白い吐息は空
中にふわりと浮いて消えて行く。あまりの寒さに手をさすりながら
息をかける私と園子の間には沈黙という名の壁があつたが、それを
先に壊したのは園子だった。

「ねえ、蘭」

「ん？」

「どうしてコナン君は突然帰って来たのかしら」

「……」

そういえば、こっちに帰って来たとしか聞いてない。あまりにも突
然すぎ、そして十年も経ったコナン君の容姿容貌が新一に似すぎて
いて、理由を聞くことなど忘れていた。

「きっと、ご両親の仕事が忙しくなっただんじゃない？」

「そう……。ねえ、蘭、もう一つ」

「なあに？」

少し間を置いた園子が遠慮がちに問うた。

「どうしてあの子はあんなに新一君に似ているの？」

思わず、歩いている足にブレーキをかけ、立ち止まってしまふ。俯いた私の顔を心配そうに覗き込む園子の目と目が合った。

「ごめん、禁句だったね」

「……大丈夫よ、もう良いの」

「良いって？」

「新一のことは忘れることにしたの」

簡単に言えてしまった自分に驚いた。そして同時に足が勝手に歩きます。園子は後ろから小走りで私を追いかけ、ぐいつ、と私の腕を思い切り掴んだ。

「そんなっ！どうして……！」

「亡くなった人を想い続けるというの？」

「そんなこと言ってない、けど……蘭。あなた、あんなに新一君のこと好きだったじゃない!!」

「もちろん好きだったよ。好きだった……」

悲しく微笑んでみせる。伊達に親友を十年も続けていた訳ではない。やはり、気付いたようだった。

「あんた、まさか……」

「園子、中で話そう」

喫茶店を指差し、園子は黙って首を縦に振るだけだった。

とりあえずコーヒーを二つ頼んで、また沈黙。園子はどうやら頭の整理がつかないらしく、思いつめた表情でしばらくいると、あつという間にコーヒーが運ばれて来た。

私は小さいガラスの箱をパカリと開け、中から角砂糖を取り出して黒く濁った中へポトリ、と落とした。更にミルクも加える。黒かったコーヒーがそれらを足すことによって色が変わり甘味を増す。スプーンでくるくるとかき混ぜると渦が出来た。それを見つめていると吸い込まれてしまいそうで、ぼうつ、とする前に園子が徐に口を開いた。

「単刀直入に聞いわ」

「……」

コーヒーを一口飲んで、目で“了解”の合図。

「蘭、コナン君が好きでしょ？」

やはり。目を逸らしてしまった。

正直、そのことについては自分でもまだ良く分からないのだ。気持ちの整理ができていないというか、コナン君のことが好きといえれば好きだし。恋愛感情か、と尋ねられてしまえば、否定はできないが、良く分からない。

「分からないの」

「蘭、それってさ、コナン君が好きなんじゃなくて、“新一君に似ているコナン君”が好きなんじゃない？」

「何が言いたいのか？」

「だから、結局は新一君に惹かれてコナン君を彼と重ねて——」

「そんなことないわよ！」

ざわざわと賑やかだった店内が、私の叫びにも似た大声によってシン、と静まり返る。穏やかに流れている音楽だけが嫌に静けさを強調させた。しかし私はそんなことすら気にする余裕もないほどに気分が高まり、自分でも抑えられないでいた。

そして大声を上げたのは私だというのに、周囲のお客さんに苦笑いを浮かべながらすみません、と頭を下げる園子を見て、やっと自分

が悪いと気付いた。

店内はまた徐々に賑やかさを取り戻していく。

「園子。ごめつ……、わ、私……」

涙で上手く言葉が続かない。

この涙は自分の気持ちを理解できずに苦しむ涙なのか、園子に申し訳なく思う涙なのか、あるいは……。

あるいは、新一を失ってしまつて悲しむ涙なのか――。

きつと、全部だと思う。もうこれ以上みんなに迷惑をかけたくない。コナン君を愛してしまうかもしれない自分が怖い。

「蘭、一人で抱え込まないで。もっとたくさん相談してよ」

「蘭は独りじゃない。それに私たち、親友でしょう？いつから相談もしてくれないくらい冷たくなったのよ」

「私は蘭の味方だから、蘭が決めたことには反対しないし、応援したい」

「コナン君を愛したいのなら愛せばいい」

園子、涙が止まらないよ。

ぼろぼろ、と溢れ出す涙は一向に止まる気配もなく、私の瞳は優しげに見つめる園子の瞳を捉えた。

そして気付いた。園子の瞳の端に溜まる、涙、涙、涙。

「蘭っ……、辛いよねえ、恋って」

「う、んっ」

「初めてこんなに夢中になれた愛してる人が突然死んじゃったなんてさ、信じるなんて言われても信じられないよね」

まるでプツリ、と糸が切れたように涙を流し始めた園子は、それでも笑顔を絶やすことなく切なげに私に言葉を投げかけた。

「蘭」

「ん？」

「本当にコナン君のこと、真剣に考えて良いんだよ」

「でも、」

「先生と生徒だから、なんて関係ないわ。ましてや年の差なんて。だから私は応援する」

コーヒーをぐいぐいと飲む園子に思わず吹き出してしまつ。こっぴや

って彼女はいつも私を勇気付けてくれるんだ。

「園子、ありがとう」

「うん！よし、買い出しに行くかぁ！」

元気良く大声を上げた園子に今度は視線が集まる。どれだけ騒がしい客だと思われたことだろうか。私と園子は顔を見合わせて大いに笑った。

コナン君のこと、真剣に考えてみよう。そして彼とたくさん話をし
て、もっと彼のことを知ろう。彼を愛しているのか、ただ新一と重
ねているだけなのか。そうすれば自ずと答えを導くことができるだ
ろう。

これで気持ちの整理がつくだなんて安心した私がバカだった。

第6話 愛したいのならば愛せばいい（後書き）

お久しぶりです、毒薬娘です。

更新が大変遅くなってしまうって申し訳ありません。相変わらずの携帯の不調が原因でもあるんですが、私自身も忙しくてなかなか執筆に励めないという状況でして（´Д、；）

そしてきつと、今回が今年最後の更新とさせていただきます。みなさんぜひ来年も『オモイビト』をよろしく願います^^

そしてできれば新連載も〴〵考えているのでそちらの方もよろしく願います！

それではみなさん、よいお年を！

第7話 行き交う感情とそれぞれの想い

大の字になって大空を仰ぐ。

青い空には雲がぷかぷかと浮いていて。普通、綿飴のようだとか柔らかいイメージを連想させるそれは、消しゴムで消した空白のようなものに、俺には思えた。きっと気分が優れていないからだろう。それでも、ここ数日間のモヤモヤを解消するためには絶景の場所だった。

何かが違うと思った。

退院してからは発作も起きなくなり、再び高校に通うなど普通の日々を毎日繰り返していた。しかしその繰り返していく日々の中でここ最近の蘭は何か違っていった。俺に対する態度というか、接し方というか。どちらかというと“コナン”ではなく“新一”の時のような感じなのだ。それを俺は懐かしいと思いつつも、やはり封印したもう一人の自分に話しかけてくる蘭に、むず痒い思いも抱いていた。

「あ、コナン君」

噂をすれば、とはこのことか。なんて苦笑して動かずに彼女が顔を覗いて来るのを待った。

「蘭姉、あ、……毛利先生」

「うん、よくできました」

にこり、と微笑む蘭が、この大空の端から、ぬっと現れた。それを確認して俺も上半身だけむくりと起こす。

「慣れないんだよね、その名前」

「何よー！私は先生らしくないっていうの？」

「いやいやそういう訳ではなくて」

少し汗を浮かべながら苦笑すると、蘭もクスツと笑って微笑んだ。

「私ね、もっとコナン君とお話したい」

「話？何の？」

いきなりどうしたんだ、と疑問に思ったのに蘭はあはは、と声を出して笑った。何かおかしいことでも言っただろうか。

蘭は口元を上げたまま目を伏せてまた一度、ふっ、と笑みを零した。

「何でもよ。些細なことでもつまらないことでも、何でも」

「いつも話してるじゃない。どうしたの？」

俺がそう言っていると、蘭は伏せていた目を上げ、それは俺を捕らえた。見つめる瞳が、違う。

悲しさを秘めたような切なげな瞳には俺が映っていた。

「わ、私ね……」

照れたような、赤い顔。それは“新一”の時にしか見せなかった、言ってしまうは俺だけの特別な蘭の表情。これに俺は何度胸をキュンとさせたことだろう。

「うっん、何でもないっ」

「何それ。蘭姉ちゃん変なの」

「違う。毛利先生、でしょ？」

「はいはい」

「もう！はい、は一回！」

こうやってあまり気を使わずに言葉を交わせたり、冗談を言い合えることができるのも嬉しいが、その反面、やはり拭いきれない違和感。

再び大空を仰いだ。

昼休みのこの時間帯にこの屋上に人がいないというのは珍しくなかった。まあ寒い季節になったものだから仕方ないだろう。けれども俺にとって頭を冷やすには気持ちの良い風だった。

ひゅるる、と冷風が俺の頬を撫でていく。

そんなことを考えていると、ふわりと心地良いものが俺の首に巻かれたことに気付いた。

「風邪、引いちゃうよ？」

「蘭姉ちゃんこそ」

蘭の香りがするマフラーが一気に俺に熱を与える。それを確かめるように俺はマフラーを強く握りしめた。

「私は大丈夫よ。授業の準備もあるから、もう戻るわ」

「……………」ありがとう

「コナン君も早く教室に戻るのよ？」

じゃあね、と微笑んで軽く手を降った蘭に微笑み返して、蘭が視界から消えて行ったのを確認すると、ドアの裏へと一度目をやって再び寝転ぶ。

風は相変わらず冷たかった。

「立ち聞きなんかしてねえで、出て来いよ」

「……………」

さすれば、足音と共に現れた影が、俺に重なった。

「別に立ち聞きはするつもりはなかったのだけれど、」

「わあつてるよ、そんなくらい」

「……………」

そして音も立てずに彼女は俺の横に腰を下ろした。しばらく流れる沈黙。何だか眠ってしまいそうだった。

「なあ、灰原」

「何？」

「蘭のこと、どう思う？」

「どう、って？」

「だからよ、最近いつもと違う、とか」

「あら。分かってたのね」

安心したわ、だなんて興味なさそうに呟く灰原を俺は横目で見ると、不意に目が合う。先に逸らしたのは彼女だった。

「彼女のあの目は、異性を見る目」

「異性を見る目？」

「そう。好きとか、少なくとも気になるって思う異性に対する目よ」

あまりにも彼女が真剣に語るものだから俺は吹き出してしまった。失礼だからあまり言えないが、灰原も恋とか語るのか、なんて思ったのはここだけの秘密。

「なあに？その吹き出し様は。まるで私なんかでも恋とか語るのが、とでも言いたそうね」

鋭い視線に射抜かれ、背筋がぞわっ、と震えた。凶星すぎて何も言えないが、突然、昼休み終了を告げるチャイムが鳴り響き、救われたという思いで立ち上がって出入口へと向かう。瞬間、待って、と

という言葉の割には落ち着いた声と同時に、勢いよく腕を掴まれた。

「彼女、どうするの?」

「どう、って……。どうしようもねえだろ」

「彼女は少なからず、あなたに好意を抱いているわ」

「どうだか」

「そのマフラーだって次に会う時のための口実」

「まさか」

「いつ告白という形で想いを告げられるかも分からない」

「……」

「その時あなたは、“工藤新一”という秘密を押し隠して彼女を愛
することができる?」

できない。できるわけがねえんだ。

俺はずっと、“工藤新一”として、ただ蘭を愛し続けて来た。あの
トロピカルランドでの夜までは。

「別に止めるつもりはないわ。ただ、あなた自覚してるの?」

「自覚って?」

「頻繁に発作なんて起きたら流石に彼女だって怪しむわ。あなたが

正体を隠し通すと決めたなら、距離を置くことが必要だと言っているの」

そんなこと、百も承知だ。俺は十年間も蘭に会わずにアメリカで過ごすことができたのだ。もちろん、何度も会いたいと願った。けれど、研究が思うように進まず、蘭を想うどころではないくらい、先の見えない闇と戦っていた。つまり、蘭を想う時間も年を重ねるごとに薄れていったのだ。そうして“工藤新一”を亡き者とし、蘭への想いを断ち切るつもりだったのに、それは叶わなかった。一目会っただけなら大丈夫だろう、と。毛利探偵事務所に足を運び、出て来た蘭を見た途端、熱が上がった。どうしようもなくヒートアップする蘭に対する恋愛感情が抑えきれずにいたのだ。どこまで俺は蘭依存症なんだ、と。笑うしかなかった。

「ちょっと、工藤君。聞ってるの？」

「ああ、ちゃんと考えるよ。第一まだ好きだなんて言われてねえしな、」

解かれた腕を軽く振って、俺は再び教室へと戻ろうと足を進める。授業に完全に遅刻だ。

「分かっているのね、本当に」

切なげに呟く灰原の声は、俺に届く前に冷たい風に攫われてしまった。

第7話 行き交う感情とそれぞれの想い（後書き）

遅れてしまいました、

あけましておめでとうございます！

昨年は読者様に変にお世話になりました。

昨年は数回しか更新せず、申し訳なく思いますが、今年は更に作者が受験生になるため、ほぼ更新できなくなってしまうと思います。

続けるだけしばらく更新はしますが、受験が終わればまた再開するつもりなので、どうか見捨てずによりしくお願いしてくださると嬉しいです^^*

それでは、第7話でした。

読んでくださり、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6069/>

オモイビト

2011年2月6日14時40分発行